

IX. 拠点施設整備に関する検討

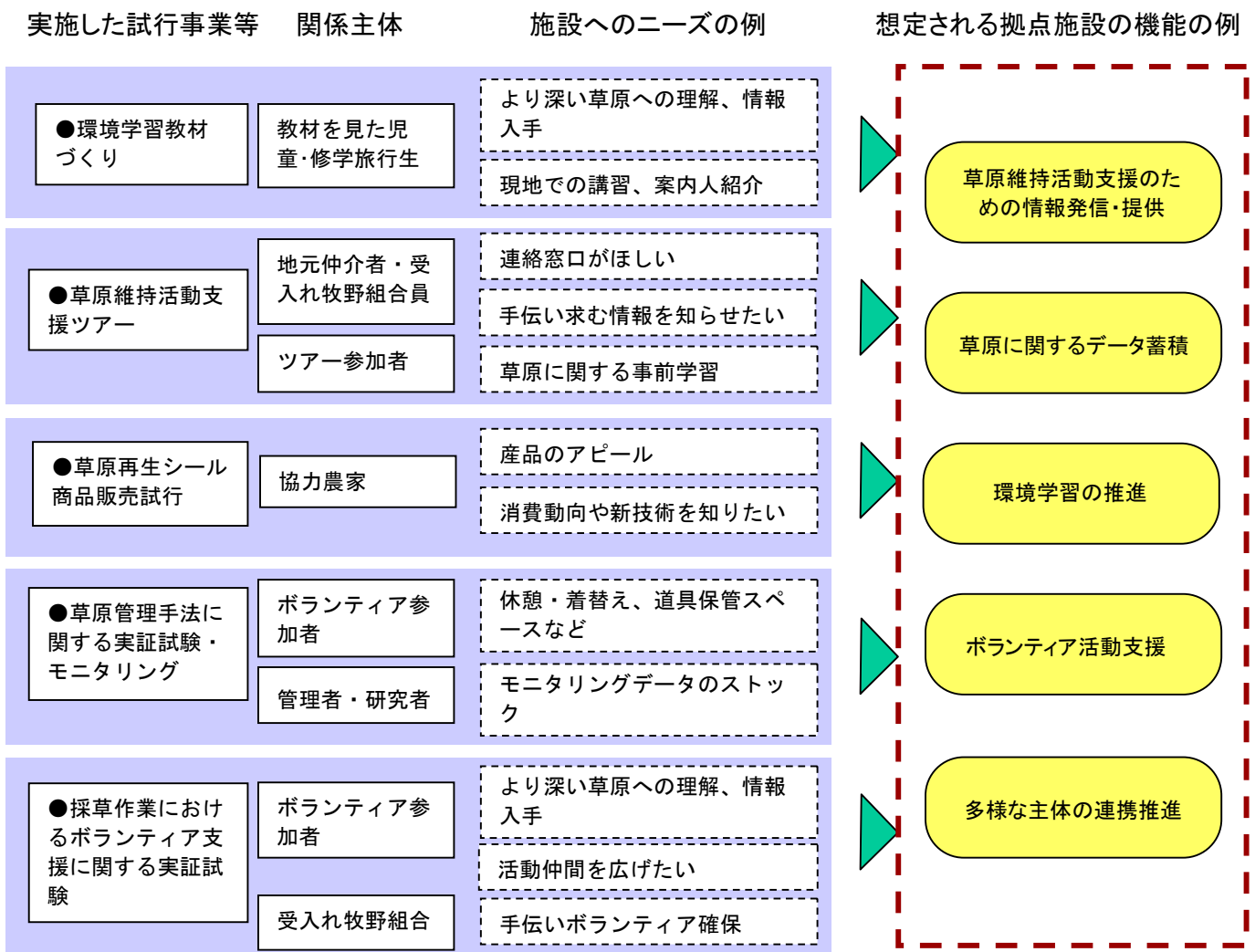
1. 拠点施設の役割

(1) 阿蘇草原再生と拠点施設

阿蘇の草原環境は、地元を主体とする野焼き、採草、放牧等の維持管理活動により成立しているが、現在では地元関係者だけでは維持管理が困難となっているところが多い。阿蘇草原再生には、地元牧野組合だけでなく、NPOなどの団体、ボランティアをはじめとする個人、行政・関係機関など多様な主体が関わっていくことが必要である。こうしたさまざまな主体の関わりを促進する上で、拠点施設の役割が大きいと考えられる。

平成15年度、16年度に調査の一環として実施した試行事業や実証試験から、図に示すように、阿蘇草原再生を進める上での拠点施設の必要性と、そこにさまざまな機能が求められていることが明らかになった。

図IX-1 試行事業や実証試験からみた拠点施設へのニーズ



拠点施設の整備に当たって想定される機能としては、ボランティア活動や草原維持活動支援にかかわること、モニタリングや草原データの蓄積に関すること、草原利用・ふれあい体験やエコツアーにかかわること、環境学習にかかわること、など幅が広い。しかし、必ずしもこれらすべてを新たに整備する拠点で受け持つ必要はなく、むしろ、地域内にすでにある関連施設や団体との重複を避け、これらと協働して、役割を果たしていくことの方が重要と考えられる。

このような意味で現在阿蘇に代替可能な施設のない、草原環境の学習にテーマを絞った拠点施設を新たに整備し、環境学習機能を中心に、草原再生に関わる関連機能を充実させていくことを検討する。

(2) 阿蘇草原再生と草原環境学習

阿蘇の草原再生には、地域の農業・畜産業の力によるところが大きいですが、同時に地域内外の多様な人々のかかわりが必要である。

阿蘇の草原環境を、地元農家とそれを支援する人々との協働により継続的に維持していくためには、草原環境の保全・再生に関わる幅広い人々が、阿蘇の草原の価値や、草原という自然生態系とそれを維持するしくみ（農業を始めとする人のかかわり）、地域の生活文化などを十分に理解するとともに、いったん損なわれた草原を再生させることのむずかしさを知り、保全・再生の重要性やその意義を理解することが必要と考えられる。

一方、人の手により維持されてきた阿蘇の草原環境は、多様性の高い二次的自然が多く残る日本の自然環境の象徴ともいえる。この二次的自然を代表する阿蘇の草原環境と再生への取り組みについて学習し、体験してもらうことによって、人が関わってきた自然を多く有する日本の自然環境やそのかけがえのなさへの理解が深まることも期待される。

このように草原環境学習は、阿蘇地域内外の多くの人々に阿蘇の草原環境の仕組みや成り立ちを学んでもらうことにより、①子供たちをはじめとする阿蘇地域内の人々には草原に関わる仕事の大切さや誇りを伝え、さらには将来地域において草原保全に関わる後継者となる者が増えるようにすること、②阿蘇地域外の人々には二次的自然の大事さへの理解と阿蘇の草原環境の保全・再生への合意を得、保全・再生への参加や協力などに主体的に取り組む者が増えるようにすること、を目的として進めることになる。

(3) 草原環境学習拠点施設の果たすべき役割

上述のような趣旨から、子供たちや学生をはじめとする阿蘇地域内外の人々が阿蘇の草原環境を学ぶことができる拠点施設を整備する。また、実際の草原で学ぶことがもっとも効果的であることからフィールドの整備についても検討する。さらに、地域内のさまざまなフィールドや施設と連携するとともに、団体や個人のさまざまな活動との協働を図る。

このように「草原環境学習」に的を絞りながら阿蘇草原再生事業の一環として施設整備を行うとすると、この拠点施設の主な役割は次のように整理できる。

- ・ 阿蘇地域内の児童、生徒、学生及び一般の人々による草原環境学習を通じて、阿蘇の草原を保全することの誇りや、草原を守る地域の人々への尊敬の心を持ってもらう。
- ・ 阿蘇地域外の児童、生徒、学生及び一般の人々による草原環境学習を通じて、阿蘇草原再生活動への参画や、阿蘇の草原保全への興味を持ってもらう。

2. 拠点施設の機能と構成

(1) 拠点施設の機能

「自然環境学習を効果的に行うためには、単なる知識の伝達にとどまらず、直接的な自然体験、保全活動への参画などが必要」である。また、「地域における自然環境の特性を踏まえ、科学的知見に基づいて実施される自然再生は、自然環境学習の対象として適切」であるとも言える（自然再生推進法に基づく「自然再生基本方針」より）。

上記の拠点施設が果たすべき役割を踏まえるとともに、このような観点から、草原環境学習の拠点施設には、以下の機能を持たせる。

- ① 草原環境に関する学習を行うための情報の伝達機能（展示、レクチャールーム、文献所蔵など）
- ② 草原の再生過程等の展示機能（見本園、休憩所／実際の草原への設置が前提になる）
- ③ 保全活動への参画のための機能

(2) 拠点施設の構成と立地条件

上記の機能を満たすために、拠点施設は2種類の施設から構成することが適当と考えられる。

すなわち、レクチャールームや資料等を備え、阿蘇の草原環境についてしっかり学習できる場所として「コア施設」を、また草原の中で草原環境の仕組みについて実際に学ぶことのできる場所（複数もあり得る）として「展示見本園」もしくは「研修フィールド」を検討する。

「コア施設」：草原環境学習のための情報伝達機能及び保全活動への参画機能を備えた施設として、公共交通機関などを考慮の上、一般利用者の便のよい場所に立地。

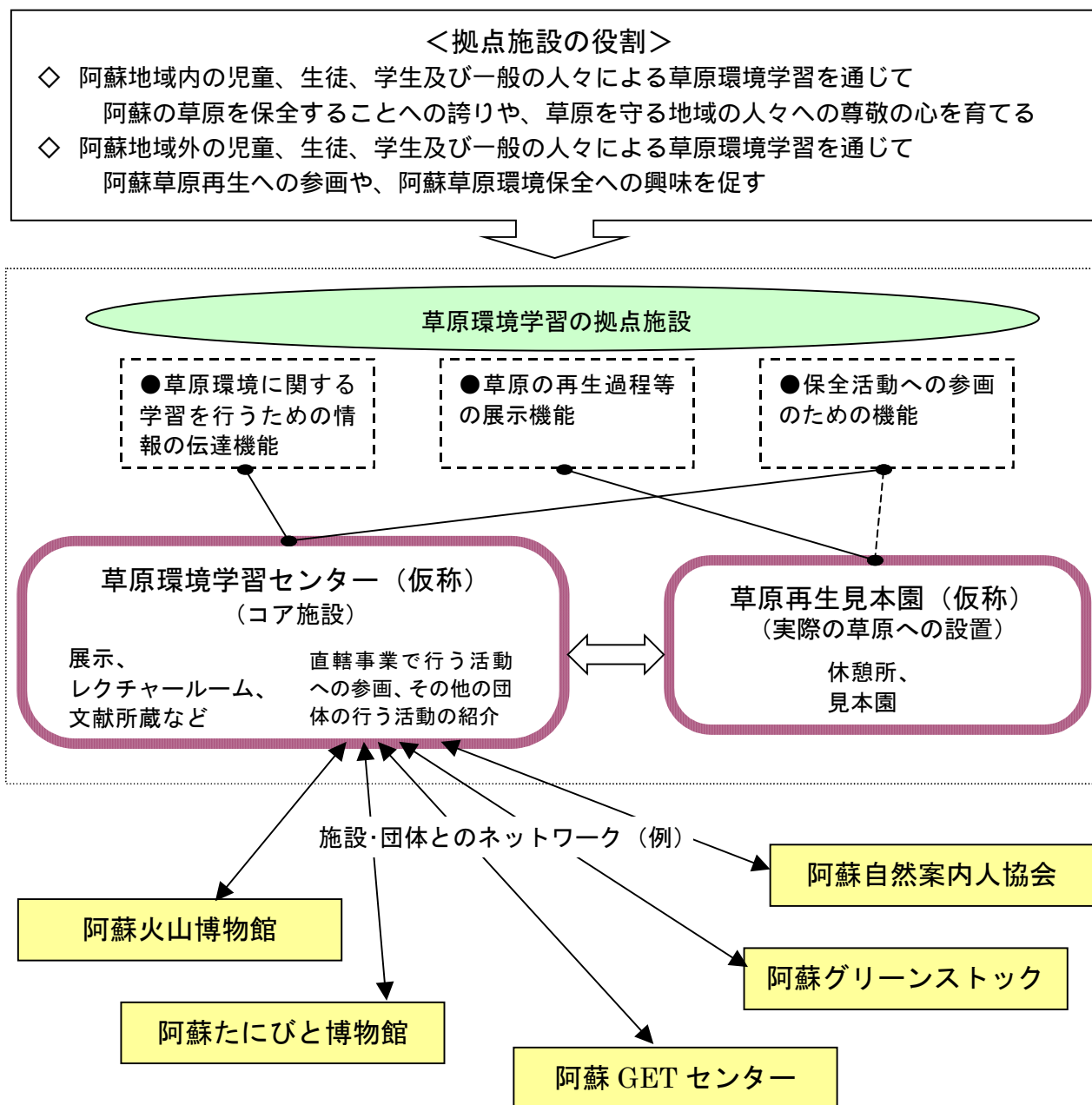
「草原内の見本園等施設」：草原の再生過程等の展示、及び保全活動への参画機能の一部を果たすための施設として、小規模の休憩所を草原内に設置し、散策路（木道など）を整備する。

両者は緊密な連絡のもとに運営されるとともに、関連施設や団体とのネットワーク・紹介機能により、利用者に対し幅広い学習や体験の機会を提供できるようにする。

例えば

- * 火山学習について：阿蘇火山博物館
- * 民俗・文化学習について：阿蘇たにびと博物館
- * 農業体験・自然体験について：阿蘇 GET センター
- * 草原維持活動支援について：阿蘇グリーンストック
- * エコツアーについて：阿蘇案内人協会

図IX-2 草原環境学習拠点施設の機能と構成



3. 施設内容・規模の検討

上述の機能に対応して必要になる整備内容や規模等について検討すると、次のようになる。

「コア施設」については、一般来訪者に対する各種案内や、展示等による草原に関する情報提供の他、団体向けの環境学習講座や指導者研修、グループ討議などができるレクチャールーム、さらに草原に関する情報を集めた資料収蔵・閲覧室を設ける。また、保全活動への参画を促すために、支援窓口機能（事務室）のほか、ボランティア作業室等を設ける。

これら諸室を合わせると、約 500 m²程度の施設規模となる（下表参照）。

施設の機能	必要な空間	規模 (m ²)	備 考
草原環境学習のための情報伝達機能	案内カウンター	7	
	展示室	120	通常のビジターCの1/2程度
	資料収蔵・閲覧室	30	
	レクチャールーム	144	収容60人程度（分割可能）
保全活動への参画のための機能	集合・休憩スペース	40	同時収容25人程度
	ボランティア作業室	50	ロッカー・給湯室付設
管理その他	事務室	40	3人程度
	資材置き場・倉庫	40	
	トイレ	30	男・女・身障者計9穴程度
	合計	501	

「草原内の見本園等施設」については、草原の再生過程等の展示が主な機能となる。さまざまなタイプの草原維持管理手法を試行し、希少種の生息状況を含めて途中経過や結果を見本園として展示するとともに、モニタリングを継続して行う。また、採草作業などの草原維持管理作業を環境学習プログラムの一環として体験できるようにする。そのために、体験プログラムや維持管理作業に必要な利便施設（更衣・手洗い・休憩など）ならびに道具倉庫、草原散策歩道や解説板等を整備する。

4. 運営のイメージ

当施設の運営は、次のような考え方に従って行うことが考えられる。

1) 既存団体との連携による環境学習プログラムの実施

既存団体が効果的に活用できる施設とすることを旨すとともに、既存団体の運営への参画を促す。

具体的には例えば、関連する活動団体との連携を図りながら、草原をテーマとした環境学習プログラムを実施する。施設独自のプログラムを企画するとともに、プログラムの運営を活動団体に委託することも検討する。また各団体が主催するプログラムにおいても、当施設を効果的に活用してもらうよう必要な調整等を行う。そしてこれらのプログラムを総合的に外部に案内し、学校の総合学習や修学旅行などに利用されるように展開する。

2) 関連する施設・活動団体とのネットワーク構築

関連する施設・活動団体との情報連絡を緊密にするとともにこれらに対する窓口機能、紹介機能を充実させ、利用者に対し幅広い学習や体験の機会を提供できるようにする。

3) 草原内施設利用に当たってのルールづくりとそれに沿った利用

草原内の見本園等の利用に当たっては、草原環境保全の観点から利用のルールを明確にし、場所によっては不特定多数の者の立ち入りを避け、施設管理者またはボランティア等が草原環境学習のプログラムとして案内する。

4) 草原関連情報の蓄積と草原維持管理手法のモニタリング

阿蘇草原再生に関連して行われる各種の調査結果を継続的に収集整理して閲覧に供する。また全国の里山の再生など、日本の二次的自然とその再生に関する情報を集積していくことも考えられる。草原内施設については、草原維持管理手法の試行及びモニタリングを継続して行い、その結果は環境学習に役立てるだけでなく、管理技術に関する情報として蓄積し地元還元する。